

主婦の戦争体験記

この声を子らに

いずみの会編

風媒社

主婦の戦争体験記

1965年10月10日発行

¥ 300

編 集 いずみの会
「戦争体験記」編集委員会
四日市市赤堀199—1
葛原清子内

発行者 稲垣 喜代志

発行所 名古屋市中区
茶屋町 3—4 風 媒 社

＊中部出版印刷 ＊鈴木製本

主婦の戦争体験記

この声を子らに

いずみの会編

風 媒 社 刊

表紙絵

水谷 勇 夫

序にかえて

長谷川 正 安

「戦後は終わった」という人々がいる。もし、本当に戦後が終って、戦争の思い出が無用となってしまった人々がいるとすれば、その人々は幸せだというよりほかはない。

私のように、戦争の最中に教育をうけ、第一線でたたかい、敗れ、多くの友人を失い、そして生きのこった「戦中派」の一人には、戦後はなかなか簡単には終わってくれそうもない。私は憲法学者であるが、先頃、現在の憲法をまもり、改悪に反対するために全国憲法研究会を結成した約二百人の憲法研究者の中核をなすのが、「戦中派」憲法学者なのであった。私たちにとって、私たちの行動の出発点となるのは、共通の戦争体験である。

私たちは、戦争の原因に無知であった。戦争のもたらす惨禍を直視しようとしなかった。戦争を防ぐ方法に無知であった。こうした際限のない反省が、戦後の私たちの行動を、平和と民主主義を目標とする大衆的な行動に向けてくれた。私たちには、のこされた一生が、「戦後」なのかもしれない。戦争で死んだ人々がなにも言えず、なにもできない以上、生

きのこった私たちが、それを代ってする義務がある。

この本に集められた主婦の文章をよむと、私だけではない、多くの家庭の主婦たちにとっても、けっして戦後は終っていないのだということを、改めて感じさせられる。一つ一つの文章に、二〇年も前の思い出が、昨日の出来事のように、なまなましく再現されている。どの文章をよんでも、過ぎ去った思い出をなつかしむような調子はない。その再現をおそれるうれいが、淡々とつづられている文章の行間にあふれている。そこに、私は、戦後二〇年の生活をぐりぬけてきた主婦の、政治意識のたかまりを感じる。女性の、高いとはいえないが、深く根をおろした、平和と民主主義への積極的な意欲が感ぜられる。

私たちは、戦争中の私たちと同じ年頃の子供をもつようになった。戦争も徴兵検査も出征も慰問袋も知らない幸福な子供たちが育っている。しかし、この子供たちの幸福が、戦争への無知の上にきずかれているとすれば、戦後を終らせ、新しい戦争の準備をしている軍国主義者たちの、好餌とならないともかぎらない。私たちの経験を、そのときと同じ年になった私たちの子供に伝えることの教育的意義を重視しないではいられない。

ある個人の人生、ある家庭の歴史が、日本民族そのものの歴史であるということを、この文集をよんで痛感する。私たちは、同じ苦しみを耐え、同じ楽しみをよろこぶ、同じ時代に生きてきた。これからも生きていくことであらう。

(名古屋大学教授)

目次

序にかえて

長谷川正安

■ 望郷

ハルピンの一年間

10

崩れ去った王道楽土の夢

18

濟州島のできごと

25

笹舟

32

雪の舞鶴

38

■ 召集

弟のこと

44

召集

47

戦争のころ――断想――

53

私と姉の記録から
内地の灯を前に

夫 婦

夫 の 悲 願

風呂敷包み一つの花嫁
満身創夷となつて
流れの中から

戦時下の子ども

草 い き れ

集 団 疎 開

走 馬 燈

すみぬりの教科書

勤 労 動 員

暗い女学校生活

国防色の青春

娘に語る

いくさはいや

虱（しらみ）

飢え

飢餓の思い

貧乏物語

ひもじかったこと

空襲

母の死顔を手鏡で

火の雨

183 176

169 162 154

144 137 133 127 120

悔 恨

人格無視の時代

「戦時奉公館」の寮母

長い長い戦争

地震と空襲の日々

原爆許すまじ

戦争は終っていない

編集を終えて

座談会「平和をまもるために」

資料 I

年表・日本を中心とした政治経済の動き 私たちの生活

資料 II

戦時下の空襲・動員・日常生活・公益事業に関する資料
及び名古屋市の年表

230

226 220 214 207 201 195 187



望

鄉

ハルピンの一年間

堀内 こま子

八月九日より十五日まで

「バーン」「キャアー」

暁の静寂を破った異様な物音に目をさました。いそいで窓から外を眺めると、薄あかりの東北の空のはるかむこうに、サッ、と赤い炎が上がった。続いてがやがやと人の声。

不吉な予感に胸騒ぎをおぼえ、起き出して外に出て見ると、近所の人も出てきて、「何だろう」「火事かしら」と話しあっていた。これがハルピンでのソ連参戦の空からの第一弾であった。

その頃すでに、沖縄が陥落し、広島に新型爆弾が落されたことも報道されていたので、いよいよここも最後の時が来たのかと思った。主人は生後一年の三女を背負って軍刀を持って、私は長女と次女の手を引いて出刃庖丁で、と最後には斬り死をする覚悟をした。し

かし、時々一機が偵察に来るくらいで空襲もなかった。

二、三日後、隣の軍属のMさんが「軍の命令で前線に移動します」と、トランク三コを持ち、子どもさんを背負って出て行った。翌日には、仲の良かった軍医の奥さんのYさんが、「五城から三日もかかって歩きつづけてここまで来たけれど、また前線に移動を命ぜられたので出発します」といって訪ねてきた。そして「靴をはきつぶしてしまった」というので、私のスケート靴の刃金はずして貸してあげた。

「お大事にね」「さようなら、さようなら」

これが最後かと別れを惜しんだ（後で知ったことは、将校の家族だけ朝鮮経由で日本に帰ったのだった。奥さんたちは何も知らずに命令に従ったのだったが、それきり二人とも音信不通だ）。

関東軍の主脳部が意見がわれてもめているとか、軍人は居ても武器がないそうだ、とかデマが飛んだ。私たちは買えるだけの食糧を買いこんだ。

重大放送がある、といわれた十五日の昼も雑音がひどくて家のラジオはよくきこえなかった。午後二時頃になって「負けた」と全身の力が抜けてしまったような打ちしおれた様子で主人が帰ってきた。籠城、斬死、と気負い立っていた私も、へたへたと玄関に坐りこんでしまった。

「ドン、ドン、ドン」

すごい力で玄関の扉が破れそうになる。ソ連兵の定期便だ。毎日一回は必ずやってくる。寄宿舎を追われた看護婦さん三人と、郊外の社宅が危険なので逃げて来た医員の奥さんと赤ちゃんをあずかったので、だれかにもしものがあつては、と私は気が気でなかった。みんなを急いで洋式便所兼風呂場にかくし、内から鍵をかけさせ、私は赤坊を背負ってから扉を開くことにしていた。顔はわざと真黒にして、「バジャールスタ」（どうぞ）などとおぼつかないロシア語で応待すると、あまり乱暴もしないで、時計、万年筆、衣類、トランクなど、ほしいものを二、三持って出て行く。やれやれと胸をなで下ろして皆を解放する。私の家はこのくらいだったから上の部だ。

八月末のある日の夕方、私が玄関の戸を一寸開いたら、ソ連兵が抜刀して階段をかけ上がってくる。びっくりして扉をしめたら、そのまま家の前を通りすぎて三階へ上がって行った。どこへ行ったのかしら、と心配していたら、裏口から三階のKさんの弟嫁さんがかけ下りてきて、「ねえさんがソ連兵に暴行されそうです。助けて下さい」という。しかし相手は武器を持ったソ連兵、こちらは丸腰の敗戦国民、どうすることもできなかった。

次の日には、三階のNさんの家にソ連兵をつれた中国人が押し入って、家中の目ぼしい家財道具の殆んどを略奪した。商売でその中国人に損をさせたことがあったので仕返しされたのだ、ということだった。

また、九月になってから、主人がキタイスカヤの知人の家に往診に行った時も、通りすがりのソ連将校にいきなり、「ダワイ」（出せ）とやられ、お金の代りにひまわりの種を出したら、怒って腰のピストルに手をかけた。そこを運よく見張りのソ連兵に見つかって、将校が連れて行かれたので、危く助かったこともあった。

こんなことが約一カ月続き、毎日生きた心地がしなかったが、そのうちソ連の有名なゲーペーウーが入ってきて、悪いことをする兵は、その場で射殺して見せしめたので、その後はだいたいよくなった。なんでも最初に入ってきたのは、刑務所にいた囚人部隊だったそうだ。日本人ばかりでなく、中国人にも朝鮮人にも悪いことをしたので、皆から恨みがあった。その他、重要器材や食糧・燃料・家畜までどんどん鉄道で本国へ送ったので、一般民衆の反ソ気運はすでにその頃から芽生えていた。

強制立ちのきと日本人狩

八月二十日すぎだった。

「内科のYさんの家が一時間以内に立ちのけといわれて大さわぎだったそうだ」と主人がいうので、翌日私は三女を背負って立ちのき先を探しに行った。ソ連軍が入ってから初めての外出だった。

人通りは少なかった。街角の軒下に棍棒を抱えた中国人が眼をぎよるぎよるさせてこちらをにらんでいた。びくっとして逃げるようにその前を通りすぎ、次の角へ行くとここにも棒を持った人がいた。こちらを威かくするようなその眼つきは「おれたちは勝ったんだ。お前たちは敗けたんだぞ、今度はおれたちが仕返しをしてやるぞ」といつているように見えた。私は怖かったけれど、どうしても家を探さなくては、と思って走り歩いた。

神社の前まできたら、境内に日本人の男子が二列に並ばせられていた。ソ連兵が五、六名銃を持って監視していた。人数は百人位。そつと見ると、浴衣がけの人、半ズボンの人もいる。抵抗すれば殺されるので、おとなしくつながれている。これが今までの日本男子かと思うと情なくて涙が出そうだった。

あとで聞いた噂では、逃亡者が多くて、捕虜の人数が足りないから、員数を合わせるためにつかまえられたのだそうだ。棒を持った中国人は、日本男子を見つけてソ連兵に引渡すために立っていたのだそうだ。私は男でなくて助かった。この頃からソ連に送られて強制労働をさせられる、という噂が立って、男たちは家にとじこもってしまった。ところが

家にも引っぱられるともいわれ、屋根裏や床下にかくれ場を作る人も多かった。

あわれな避難民

奥地から無蓋車でぞくぞくと避難民がハルピンに到着した。主人は毎日駅や収容所へ行ってその人たちの救助、診療に奉仕していた。身ぐるみはがれて仕方なく穀類を入れる麻袋に穴をあけて首と手足を出して着ている人、ソ連兵の暴行に備えて髪を男のように短くしてしまひ、おまけに汽車の煤煙で真黒になって、男か女か人間かどうかともわからなかった人たち、こんな人たちは開拓団の人だ。

話を聞くと、ソ連軍来襲の噂で鉄道の駅まで逃げてくる間に暴民に襲われ、大切な荷物や愛児まで捨てさせられて、命からがらようやく駅までかけつけた時には、すでに軍人と役人の主だった人たちは引揚げた後だったり、やっと引揚げ列車に間に合っても、もういっばいで乗せてもらわれず、汽車が出たあとぼう然としているところをまた暴民になけないのリュクサックまで略奪されて無一物になってしまったのだそうだ。

九月中旬頃、主人は香坊の数万人も集まっている旧義勇隊訓練所跡の収容所へ一週間ばかり診療の応援に出かけた。毎日三十人から四十人の死亡者があり、そのほとんどは子どもで、しまいには墓を掘るのも間に合わず、一括埋葬となり、ヂフテリヤの血清がなくて、